

平成 28 年度第 2 回福井県総合教育会議 結果概要

◆ 主な意見

<英語教育>

- 小学校の英語を教科化して、何をどこまでやるか。早く始めること自体はいいと思うが、誰が何を教えるのか、はっきりさせて進めることが大切である。
- 力を入れて英語を勉強するほど、レベルの差が広がる。どのレベルに合わせるかも難しいが、習熟度によるクラス分け、個別指導などを取り入れることが必要である。
- 日本語を学んでいる段階の小学生に英語を教える際は、語順や時制など日本語との基本的な違いを押さえて、子どもが混乱しないように教えることが必要である。
- 平成 30 年度の教科化に備え、来年度前半に教材や指導案を作成。年度後半はそれを県全体に広げていくための研修などを進めていきたい。

<ICT の活用>

- インターネットの活用に加え、著作権など情報の活用についての学習が必要である。
- ICT 教材については、教科ごとにどう使って授業をどう変えるのか。デジタル教科書を使うだけでは、理解の促進につながらないのではないか。

<ふるさと教育>

- 地域コーディネーターの設置など、地域の人材や企業との連携は大切。職業教育においても、企業と連携して成果物をつくることでも、福井に対する理解が深まる。
- 地域や企業と実際につながりを感じることで、福井の何がいいかを理解できるし、将来的に福井に就職したいという思いにもつながる。
- 地元のことを分かっていくようにしないと、一生懸命教育しても、東京や大阪に出ていってしまうことになる。
- 子どもたちに対するふるさと教育はしっかりと行っているが、保護者など大人に対する働きかけも考えていく必要がある。

<芸術教育>

- 音楽堂でのオーケストラ鑑賞など、本物に触れる芸術教育を今後も継続してほしい。
- 吹奏楽の楽器は老朽化しており、指導者の育成も含め、県による支援を検討してほしい。全国大会の金賞など成果があがらないのは寂しい。
- 楽器の共同利用や少額の個人負担など吹奏楽支援の仕組みを工夫してはどうか。

<学校業務の効率化>

- 教員の超過勤務時間は長く、ぎりぎりの状態ではないか。管理者が残業の理由を報告させたり、先輩教員が指導して事務を効率的に進めるなどの工夫が必要である。
- 平均の超過勤務時間と比べても、残業が長い教員はもっと多いと思う。部活動の顧問などが主な要因だと思うが、校長なりが教員間の負担を案分することが大切である。
- 一般的な平均ではなく、小・中・高校、教科などもっと分けて考えてはどうか。
- 多忙な教頭の業務の分担、夏休みの活用、書類作成などシステムを変えないと物事は変わらないのではないか。何をやっても忙しいというだけになる。

以 上